DesireProtection〈ディザイア・プロテクション〉

ノノ川玲二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｓｉｒｅ Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〈ディザイア・プロテクション〉

【Ｎコード】
Ｎ３８１１Ｙ

【作者名】
ノノ川玲二

【あらすじ】
ある晴れた朝、典型的な地味な男子校生・北埜玲矢（きたのれいや）は、学校に向かってしばらく歩いていた。
学校まであと少しの時に、体力を使い切ったようにふらふらと歩いていて、今にも倒れそうな月夜杏里（つきよあんり）という少女が声を掛けてきた。
杏里には行きたい所があるらしく、放って置けない玲矢は目的地ま

で運ぶ事にした。

杏里を運ぼうとした直後、玲矢の前に男が現れた。

そして、男はいきなり姿を変え、機械の塊の様な化け物になって襲い掛かって来た。

玲矢は杏里を連れて必死に逃げ続けたが、すぐに追い詰められた。

もう駄目だと思ったその時、化け物の前に立ちはだかったのは、鎧の様な物に身を包んだ杏里だった。

動揺している玲矢に杏里は逃げるように言い、化け物と戦い始めた。

第1話　鎧のケイセイ

ある晴れた朝、典型的な地味な眼鏡男子校生・北埜玲矢（きたのれいや）は、学校に向かって歩いていた。

玲矢は基本的早起き苦手で、よく分からない文句を言いながら登校するのが日課であった。

「あー、だりぃ…
朝に学校行くのを考えた奴くたばれや」

今日も学校の創立者に失礼なのかよく分からない文句を言い、玲矢は学校に向かう。

今日もいつもと変わらない朝、いつもそこにあった日常がやって来る…はずだった。

しかし、今日はいつもと違う日…
それどころか、この日から彼の日常というのは消えてしまったと言ってもよかった。

◇

高校まであと１０分という時、玲矢は奇妙な少女を見付けた。
その少女は玲矢よりも少し年下の様で、日本人らしい凛とした顔付きをしていながら、それと対照的に輝く銀髪を持っていた。
見掛けない制服を着ていて、足取りが覚束ないようで、ふらふらと倒れそうに歩いている。
いかにも、体力がありませんという雰囲気を醸し出していた。

「大丈夫か、あれ…」

そんな独り言を言っていると、少女が玲矢に向かって歩いて来るのであった。

「あ、あのぅ…」

「うっ…」

少女が捨てられた子犬の様な目をして、今にも消えそうな声で話し掛けて来た。

（うわー、無視しずれぇ…
でも、俺女子と話すのあんまり好きじゃないんだよな…）

玲矢は内心そんな事を考え、少女を無視しようとした。
…のだが。

「ぐすっ、ぐすん…
あのうぅ…助けて下さいませんか？」

「ぐうっ…！」

少女は、大切な家族を失ったような切ない目で見詰めてくる。

（こ、これは無理だな…）

見るに堪えられなくなった玲矢は、これ以上か弱い少女を無視する出来なさそうので、仕方なく話を聞く事にした。

「…えーと、何？
話ぐらいなら聞いてあげるけど…」

「あ、ありがとうございますっ！
え、えっ、えーと…」

何故だかお互いにぎこちない会話だった。
少し間、小さな沈黙が二人の間を駆け抜けた。

「・・・」

気まずさから生まれる嫌な空気だった。

だが、そんな空気を打ち破ったのは少女だった。

「あのっ、実は頼みたい事がありますっ」

「…頼みたい事？」

「あんりは行きたい所がありますっ。
しかし、あんりの体力はもう限界でしてっ、良ければ貴方に運んで貰いたいんですっ！」

「お、俺に…？」

「はいっ！」

あんりと名乗る少女は屈託の無い笑顔で、元気よく頷く。

（うわー、断りずらい…
いや、女子運ぶなんて俺には…）

玲矢が迷っていると、あんりは追い撃ちをかける様に言った。

「ぐすん、えぐっ…
うぅ…ダメっ…？」

「ぬぐうっっ…！！」

あんりはさらに、世界から見捨てられそうになっている様な切ない目で玲矢を見詰めて来る。

さすがに折れるしかないと思った玲矢は、ため息をついてしゃがんだ。

「あー、もう、分かったからさ。
とりあえず、泣くなよ…
運んでやるから」

「えっ、いいんですか！？
あ、ありがとうございます！
貴方は私の唯一の救世主ですっ！！」

「そんな大袈裟だって…」

涙を拭き取ったあんりは、万遍の笑みで玲矢の背中に飛び付いた。
今まで見たことも無いような純粋な笑顔に、玲矢は照れてしまっていた。

「はぁ、参ったな…
嫌になるぐらいの純粋さなんて反則だろ…」

「んっ、どうかしましたか？」

「い、いや何でも無い。
それよりも、何処に行きたいんだ？」

「えーと、第一猪瀬高校という場所です！」

「はぁ！？」

思わぬ場所の名前に、思わず荒い口調で返してしまった。

なぜなら、玲矢が通っている高校こそが、その第一猪瀬高校だからだ。

玲矢がいきなり大声を出したせいで、あんりは縮こまっていた。

「ひゃっ、怖い…」

「あ、ごめんな…
そこは俺の学校だから、ちょっと驚いてさ」

「…！！」

あんりはガバッと背中から飛び降り、玲矢の顔を見詰めて言った。

「私、その学校に転校して来たんですっ！
それで、今日は登校初日という訳でして」

玲矢は内心、転校して来た初日から体力無くて行き倒れるってダメだろと思った。

「あー、なるほどな。
道理で見掛けない制服だったのか…」

「そうなんですっ！
本当はちゃんと指定の制服で来たかったんですが、転校してたのすっかり忘れてましたっ」

「いや、ダメだろ…」

あんりは、てへっと言った。

普通ならそんな事しても済まされないぞ。

「まあまあ、制服を二年間も着ると身体の一部見たいなもんですからねっ！
間違えても仕方ないじゃないですかっ！！」

清々しい程の開き直りである。
それでも、気持ちは分からなくは無いが。

「あ、ニ年間着たって事はニ年生なのか？」

「そうですよ、立派なニ年生ですっ。
よく一年と間違われますね。
全く、失礼な人ばっかりですっ！」

「あっ、ああ…
ソウダナ、失礼な奴ダヨナ…
俺ハちゃんと同級生ダッテ分かってたヨ」

『ごめんなさい、実はそう思ってました』と思った玲矢は、動揺して変な喋り方になっていた。

あまり正直に言い過ぎると、泣くかも知れないし。

「まあ、同じ学校で同級生なんだ…
一応、自己紹介しとくよ。
俺名前は、北埜玲矢だ」

「よろしく、北埜君だねっ！
私は月夜杏里（つきよあんり）っ！！」

「月夜さんか、よろしく」

玲矢が月夜さんと呼ぶと、杏里は不機嫌そうに言った。

「えー、あんりは杏里でいいよっ。
あんりは名前で呼ばれる方がいいのっ！」

「そ、そうか？
じゃあ今度から杏里で」

「わぁーい！」

杏里は子供の様にはしゃいでいる。

本当に高校生なんだろうか。

「まあ、とりあえず学校行くか。
このままだと、二人して遅刻だ」

「うん、急ごっ！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！

その時だった、二人の目の前に何か超高速で突っ込んで来た。
無機物と無機物がぶつかった様な音が響く。

「う、うわぁ！？」

そこに居たのは、金属の塊だった。
生気の無い無機物がそこに居た。

「…浮遊鎧（ファントム）っ！！」

それを見た杏里の表情ががらりと変わった。
その時の杏里は、今まで見た中で一番冷たい表情をしていた。

「おい、杏里どうしたんだよ…？」

「北埜君、逃げてっ…」

「へっ…？
今なんて言っ…」

「いいから、行って！
こいつは、あんりが何とかするからっ！！」

杏里があまりにも必死なので、玲矢は思わず後退りをしていた。
それと同時に、先程玲矢の立っていた場所に、巨大なナイフの様な刃物が突き刺さっていた。

「うわっ！
なんだこれ、危なっ…」

その攻撃が起点になって、その無機物の様な化け物が刃物を振り回して暴れ始めた。

「うわぁぁぁぁぁっ！！」

「北埜君、下がって！」

そう言った杏里は、いきなり玲矢と化け物の間に割り込んで来た。

「あ、杏里！
逃げないと…」

「…あんりは逃げないよっ！！」

「お、おい！？
逃げないでどうするんだよ…！？」

「あんりは…戦う！！」

その瞬間、杏里の身体をまばゆい光が包む。

全身が覆われたと思った時、杏里を包んでいた光が散乱した。

光の中から現れた杏里は身体は、ドレスの様な鎧を装備していた。

「あ、杏里…！？」

「後はあんりに任せて逃げてっ！！」

杏里は何処からか取り出した弓を構えて、金属の塊に向かって行った。

「…クソッ！！

一体、何だっていうんだよ！？」

すっかり混乱してしまった玲矢は、半分投げやりのように逃げ出した。

◆

玲矢は頭を抱えながら走っていた。
玲矢の背後では、爆発音や金属音がしている。
おそらく、杏里があの化け物と戦っているのだろう。
玲矢の脳裏に声が響く。
―お前は、女の子を見捨てて逃げたも同然の事をしたのではないか？―

「だ、黙れ…」

―いつまで経っても、お前は昔のままか？
いじめっ子から逃げてばかりのあの頃と！！―

「黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れェ！！」

大声で叫んで心の声を掻き消そうとした。
いじめられていたあの小学生時代…
思い出したくもない。
しかし、声は容赦無く心を痛み付ける。

―お前は杏里見捨てた！
また逃げたんだ！！―

「…違う！
見捨てなんかない！！」

―じゃあ助けに行けるか？
初対面の相手を、命に代えても助けれるか？
お前は戦って死ねるか？―

「いや、それは…」

―なら、命に代えても戦え！
力無く戦って死ね！！
お前みたいな奴なんて死ねよ！！―

「や、止めろ…」

―死ねよ！
死ねよ！
死ねよっ！！
死ぃねよ！！
し死ぃねよ！！！
し死ねよっ！！！

し死ぃねよっ！！！！
しぃぃぃねぇぇぇっっっ！！！！！！！！

「止めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」

玲矢は立ち止まり、頭を抱えて叫んだ。
丁度その時だった。

「君、大丈夫？」

「え…？」

絶叫をした彼の背後から声が聞こえた。
声がした方に居たのは、玲矢より少し年上に見える黒い女の子だった。
一言で言うなら、何から何までが黒い。
髪の毛、フード付きのコート、瞳の色…
これら全てが真っ黒だった。
ただ一つ黒く無いのは、露出が殆ど無い真っ白い肌の色だけだった。

「どうしたの？
さっきの叫び方は普通じゃないよ？」

「俺…逃げて来たんだ。
頭が混乱して、化け物を目の前にして杏里を見捨てて…」

「むぅ…」

黒い女の子は、何か不満げな表情をしていた。

「本当に見捨てて逃げて来たの？
君はそんな事する人では無い気がするけど…」

「な、何を根拠に…」

「ブラックさんは、人の性格を見抜くのが得意だからね」

「…ブ、ブラックさん？」

聞き慣れない一人称に、玲矢は首を傾げた。
自称ブラックさんは、得意げに喋り出した。

「それは、私の名前。
私は、ブラックさんって言うのよ」

「それは…本名ですか？」

「私が自分で付けたの。
ね、ブラックなんて、私に相応しい名前でしょ？」

「ま、まぁ…
名は体を表すとか言うけれど…」

玲矢は多少引き気味で頷く。

それでも、ブラックさんは満足げな表情をしている。

「それに、杏里の事もよく知ってるからねー。
多分、助けてもらっんでしょ？」

「…！！？」

玲矢は心を読まれたような感覚に陥って、冷や汗が出てきた。

何故…杏里の事を知っているんだ？

恐怖感に似た感覚が、玲矢を取り巻く。

「な、なんで…」

「ふっふっふっ…

君、図星ね？
だって杏里は、私が『解放』させた一人だもの」

「か、解放…？」

「そう、欲望の解放…
欲望（ディザイア）の鎧（プロテクション）の力の解放よ！」

「…欲望（ディザイア）の鎧（プロテクション）？」

玲矢にとって、今日は知らない言葉をよく聞く日になった。

「なんだ、その中二病臭い名前は…」

「何よ、失礼ね！
君はこの力を馬鹿にしているの！？」

「いや、そこまでは…」

「その力を使えば、杏里を助けられるわよ」

「…！！」

玲矢は、杏里を助けられるという言葉に過剰なまでに反応した。

「あ、杏里を…

助けられるのか！？
もう逃げなくていいのか！？」

「そ、そうよ…？
何だか急に食いつきが良くなったわね？」

「ああ、当たり前だ！
これは自分を変えられるなら、それ以上の望みは無い！！」

玲矢は、自分の中に存在するもう一人の自分の声から解放されたいと必死だった。

（もしこの人の言うことが本当ならば、もう自分を責め無くていい…！
責める理由なんて無いんだから！！）

その時の玲矢は、ある意味狂っていたかも知れない。
だが、ブラックさんはこれまで自分の力を知った人間が、何度も玲矢と同じ様な反応を見てきた。
別に今更驚く事でも無い。

「はいはい、落ち着いてね？
でもね、『解放』にはちょっとした代償が必要なのよ」

「代償…？」

「欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）は、自分の欲望…もとい、求める強い感情を強化して具現化させる能力よ。
だから―その強化する感情と真逆の感情が、完全に消滅するの」

「感情が…完全に消滅だって！？
ええと、それはつまり…」

「一種の脳障害に陥るって事よ。
それでもいいかしら？」

「うぅ…」

さすがの玲矢も迷った。

なにしろ、脳障害を患ってまで力が欲しいのかと言われれば嘘になる。

なるべくなら、そんな事はしたくない。

（でも…
俺はこれ以上逃げたくない！）

玲矢は心でそう誓い、ブラックさんに向き直った。

「その覚悟無いなら、力の『解放』は…」

「待ってくれ！
覚悟なら…ある！！」

玲矢の真剣な眼差しに、ブラックさんは意外そうな顔をしていた。

（この男子、思ってたよりも度胸があるのね…
これなら、儀式をしても大丈夫そうね）

ブラックさんは内心そう思っていた。

もちろん、玲矢はそんな事は知るはずもなく…

「だ、駄目なのか…？」

「あ、いや、ごめんね。
少し考え事をね…」

急に覇気の無くなった玲矢の声に、ブラックさんは我に帰った。

「ゴホン、では確認するわよ…
二度と普通の人間には戻れないけど、そうまでして力を『解放』する覚悟はある？」

「…あるぜ！！」

「よし、大丈夫ね！
これから『解放』の儀式を始めるわ」

ブラックさんは、玲矢の額に手を翳して言った。

「鍛冶師の名において『解放』する…
汝の鎧を整形せよ！！」

「…っ！！」

その瞬間、玲矢は額に手を突っ込まれ、脳内を掻き回されている様な感覚に襲われた。

痛みは無いが、何とも気持ち悪い感覚だった。

「よし、これが君の欲している感情ね…」

ブラックさんは、何かを掴んで引っ張り出す様な動作をした。

その瞬間、脳にあった何かが消え失せた感覚と、新たに脳に何か宿った様な気がした。

玲矢の頭には、まだ何かの余韻が残っている。
それが完全に収まらない内に、ブラックさんは話し出した。

「さて、これで欲望(ディザイア・プロテクション)の鎧の『解放』は成功したわ！
さあ、杏里を助けに行きなさい！！」

「え、待てよ…
まだ何も教えてもらって無い…」

「欲望(ディザイア・プロテクション)の鎧の展開は簡単なの！
自分の欲望をを纏うイメージで…」

「全然意味が分からないんだが…」

今の言葉に腹を立てたのか、ブラックさんは玲矢の背中をぐいぐいと押した。

「ええい、習うより慣れよ！
さっさと行くわよ！！」

「ちょっ…
いやいや、待てよ！？
あー、ちょっと、ブラックさん！！？」

玲矢は、ブラックさんに押されながら引き返えして行った。

◇

「喰らえっ！！」

杏里は弓矢を使い、化け物と奮闘していた。

矢は化け物に命中はするが、虚しい弾き返される。

「くっ…！

この浮遊鎧（ファントム）、私の『リベラシオン・アルク』と相性が悪すぎるよっ！」

彼女の欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）は、フランス語で自由な王妃の名を持つ『リベルテ・レーヌ』。

鎧の名前の由来は、自由意志の感情を『解放』した事から来ている。

武器は、解放の弓を意味する弓『リベラシオン・アルク』だけ…

つまり、近距離戦には向いていないのだ。

「選りに選って、近距離特化の浮遊鎧（ファントム）が相手なんてっ…
あんりの一番苦手な相手だよっ…」

その浮遊鎧（ファントム）と呼ばれる化け物は、杏里に追い撃ちをかけるように二本の巨大な刃物で襲い掛かって来る。

「よぉし、一か八かだぁっ！」

杏里も浮遊鎧（ファントム）に向かって弓を構えて突進する。
杏里が浮遊鎧（ファントム）の目の前まで来た時、浮遊鎧（ファントム）は物凄い速さで刃物を振り下ろした。

咄嗟に避けた杏里の頭を巨大な刃物が掠める。

「今だっ…！！」

杏里は隙だらけになっている浮遊鎧（ファントム）の懐に、貫通仕様の強力な矢を放った。

「…貫けぇっ！！」

ザシュ…！！

杏里の矢は浮遊鎧（ファントム）の装甲を貫通したようで、辺り鈍い音を響かせていた。

浮遊鎧（ファントム）が、膝から崩れ落ちる。

「よし、勝ったっ…」

杏里がそう言ったのもつかの間、杏里の脇腹辺りを刃物が切り付けた。

鎧が砕け、傷口から血が吹き出す。

浮遊鎧（ファントム）が膝を付きながら、反撃して来たのだ。

「あぐっ…」

杏里はあまりの痛みに、ダラダラと血が流れ続けている傷口を押さえていた。

傷はかなり深く、激しく動く事すら難しかった。

「あんり…もう死んじゃうのかなっ？」

杏里は生気の無い小さな声でそう呟いた。

そして、浮遊鎧（ファントム）が杏里に向かって刃物を振り下ろそうとした時だった。

「そんな事…
絶対俺がさせねぇ！！」

「…えっ！？」

ガギン…！！

間一髪で杏里を切り付けようとした刃物が、何者かによって弾き返された。

杏里はゆっくりと顔を上げる。

そこには、騎士のような欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を装備した玲矢が居た。

「き、北…埜君…！？」

「大丈夫か、杏里？

脇腹から血が出てるが…」

「あんまり大丈夫じゃないかもっ…じゃなくて！！
何で北埜君が欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を使ってるのっ！？」

「…俺も杏里を助ける為に『解放』したんだ。
まあ、自分の希望もあったしね…
それにしても、展開できなくて大変だったよ」

「…！」

杏里は意外な言葉に驚いていた。

自分の事を助けたいと言われたのは、生まれて初めてだった。

「さてと…
まずは、こいつを何とかしないとな…」

玲矢は、浮遊鎧（ファントム）が目の前に向き直り、先程刃物を弾いた槍を構え直す。

「…覚悟しろ、化け物ォ！！」

玲矢は雄叫びを上げて、浮遊鎧（ファントム）に向かって突進して行った…

第2話　力のツカイカタ

「せいっ！
はあぁっ！！」

欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）の力を手に入れた玲矢は、杏里を襲った浮遊鎧（ファントム）に向かって猛攻を続けていた。

そんな様子を呆然と見ている杏里の横に、ブラックさんが現れた。

「杏里！
大丈夫、怪我とか無い？」

「あ、ブラックさん！
脇腹が切られて結構痛いかもっ…」

「傷が深いわね…
ここは玲矢に任せて、動かない方が良いわよ」

「で、でも…
玲矢君は、『解放』したばかりで…」

「多分、大丈夫よ。
相手は手負いだし、玲矢はおそらく強いわ」

ブラックさんは、戦っている玲矢に目を移した。

「玲矢の鎧は、『ブレイブ・キャヴァリィ』…
日本語訳すると、勇敢なる騎兵」

「…？
何で今そんな事を…？」

「『ブレイブ・キャヴァリィ』の特殊能力が気になってね。
杏里の鎧の『領域内束縛（テリトリー・チェイン）』みたいなのがある筈…」

「鎧の特殊能力…」

ブラックさんが言う『領域内束縛（テリトリー・チェイン）』とは、杏里の鎧『リベルテ・レーヌ』の特殊能力である。

その能力は、発動している限り半径5？以内の重力を十倍にして動きを封じる能力である。

しかし、本人にも負荷が掛かるので、いざという時まで使うのは避けている。

「でも、北埜君は今日『解放』したばっかりだから特殊能力の事は知らないんじゃ…」

「確かにね…
まあ、戦ってたら分かるんじゃないかしら？」

「うわー、アバウトですね…」

何処からか投げやり感が感じられるブラックさんを余所に、杏里は戦っている玲矢をじっと見詰めた。

（北埜君…負けないでっ！）

◇

一方、浮遊鎧（ファントム）と戦っている玲矢は焦っていた。

（い、勢いで戦ってるけど…未だに、戦い方が全然分からないんだけど！！？）

他人から見れば、玲矢は器用に槍を使いこなして戦っているように見えるかも知れない。

しかし、実際はただ何となく振り回しているだけなのだった。

本当の意味で、ただ勢いだけに任せて戦っているのだ。

「ええい、どうにでもなれや！！」

玲矢は槍を振り回すの止めて、槍を浮遊鎧(ファントム)に向けて突進した。
玲矢の頭の中では、友人と遊ぶ時は必ずと言って良い程よくやっているゲーム『ディノ・ハンターズ』の槍使いの動きの映像が流れていた。

「喰らえ、ディノハン的突進串刺し攻撃！！」

しかし、玲矢の決死の攻撃は浮遊鎧(ファントム)に掠りもせず、刃物による反撃をまともに受けてしまった。

鎧が完全に壊れる事は無かったが、手から腕にかけての装甲が破壊され、軽い切り傷ができてしまっていた。

「くっ…
痛ってぇな鎧野郎！！」

すっかり頭に血が上った玲矢は、何も考えずに浮遊鎧(ファントム)に超近距離で槍を突き付けた。

今度の攻撃は、浮遊鎧(ファントム)の胴体を貫いた。

〈グワァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！〉

浮遊鎧(ファントム)が悍ましい悲鳴が上げ、上半身と下半身が二つに裂けた。
裂けた部分からは、黒い液体を吹き出していた。

「…！
結構効いたみたいだな！！
このまま止めを…」

玲矢が浮遊鎧(ファントム)の頭部に槍を向けた瞬間だった、浮遊鎧(ファントム)は上半身だけの体で身を翻した。

「な…！？
まだ動けるのかよ！！？」

傷付いた浮遊鎧(ファントム)は驚いてる玲矢と自分の下半身に見向きもせず、背を向けて物凄い速さで逃げて行った。
それを呆然と見ている玲矢に、ブラックさんは叫んで言った。

「玲矢、浮遊鎧(ファントム)を逃がしちゃ駄目よ！！」

「えっ？」

「傷付いた浮遊鎧(ファントム)は、普段より格段に狂暴になるわ！

そのまま逃がしてたら、他の人間に被害が及ぶわ！！」

「そんな事いきなり言われても…」

「いいから追い掛けなさいっ！！」

「は、はいっ！？」

ブラックさんの気迫に押され、玲矢は急いで浮遊鎧（ファントム）を追い掛けた。

欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を装着して走っているのにも関わらず、体は不思議と軽かった。

（よし、この軽さなら走っていられる！）

しかし、いくら走っても前方に見える浮遊鎧（ファントム）の姿はどんどん小さくなる。

浮遊鎧（ファントム）の移動速度は、走って追い付ける程甘くは無かった。

玲矢から多大なダメージを受けていても、並の人間の走る速度よりは速く動けるようだ。

（でも、このスピードじゃ到底あの化け物には追い付けそうもない…

一体、どうすれば！？）

玲矢は、何か使える物は無いかと辺りを見回してみた。
しかし、周りには人の一人も見られない。
今は通勤時間の真っ只中はずだが、何故か薄暗く不自然な程人の気配が無く、生物そのものが最初から存在していないようだった。

「これも化け物の仕業か…？
くそっ、何か無いのか！？
奴を完全に仕留めれる物は…！！？」

玲矢は、息を切らしながら辺りを見渡す。

相変わらず、町には殺風景が続いていた。

目の前に続くのは、生気の感じられないビル群、沈黙する道路沿いの雑木、黒光りするアスファルトの道、点灯していない電灯、乗り捨てられたように点々と鎮座している自動車、どす黒い雲と灰色の太陽だけだった。

特に使えそうな物は無いと思われる。

…と、思ったその時。
玲矢は、脳内に電流が走った様な感覚に陥った。

それは、昔の事を思い出した時のようだった。

「いや、待てよ…
アレなら使えるんじゃないか！？」

玲矢は立ち止まって、使えそうな物を見詰めた。

玲矢が言うアレとは、自動車の事だった。

「これを使えば、追い付けるかも知れないな…！！」

玲矢は当然運転免許を持っている訳でも無く、運転の仕方をしている訳でも無い。

アクセルとブレーキの違いさえ分からないぐらいだ。

だが、玲矢にはこの自動車を使いこなせる気がした。

その時の玲矢には、どんな物だろうが乗りこなす自信があった。

「俺なら乗りこなせる…
今の俺なら！！」

玲矢はそう叫んで、勢い良く灰色の自動車の上に乗っかった。

そして、自動車のボディに自分の右手を押し付けた。

「頼むぜ、『ブレイブ・キャヴァリィ』…
お前の力を貸してくれ！！」

玲矢の頭には、何故か『ブレイブ・キャヴァリィ』の特殊能力の名前が浮かんでいた。

脳内に電流が走ったあの時から、彼は何故だか欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）の使い方が分かっていたのだった。

（わ、分かる…！
『ブレイブ・キャヴァリィ』の使い方が！！）

ふと、玲矢が車のボディに触れている右手の部分から、魔法陣の様な物が出現した。

「…『調教の右腕（トレイン・ライト・アーム）』！！」

次の瞬間、自動車は狂った様な勢いで走り出した。

車は一気に時速１００?ぐらいまで加速し、遠くなっていた浮遊鎧（ファントム）の後ろ姿が一気に近付いて来た。

玲矢は驚きと感動が入り混じった様な表情で、自分を纏っている鎧を見渡した。

「すげぇ…
これが欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）…！！」

それから玲矢は浮遊鎧（ファントム）との距離を詰めて行き、とうとう10？程の距離まで近付いた。
それとほぼ同時に、浮遊鎧（ファントム）は後ろに居る玲矢の存在に気付いたようで、方向転換をしようと体を傾けた。
そんな姿を見て、玲矢の勝ち誇った声で叫んだ。

「今更逃げようたって、遅いんだよ！！」

玲矢が乗っている車はさらに恐ろしい速さで加速し、一瞬で浮遊鎧（ファントム）を轢き飛ばした。
〈グバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア…………〉
超高速で轢かれた反動で飛ばされた浮遊鎧（ファントム）は、壁にたたき付けられ

て絶叫していたが、時間経つに連れて声が小さくなり、やがて動かなくなった。

その一部始終を黙って見ていた玲矢は、暫くしてから口を開いた。

「これは、倒したって事で良いんだよな…？」

そんな独り言に、何処からか現れたブラックさんが答えた。

その隣には、杏里が脇腹を押さえて立っている。

「そう、貴方の勝ちよ。
相手の生命反応は、完全に停止しているから」

「そうですか」

「き、北埜君っ！
大丈夫っ！？」

横に居た杏里が、心配そうに声をかけて来た。

玲矢は、笑ってこう返した。

「大丈夫なもんか。
俺達、絶対遅刻だぜ？」

◇

第一猪瀬高校では、昼休みの時間帯だった。

「はぁ、今日程疲れた日は無いな」

玲矢は自分の教室の机でうずくまり、激動の午前中の出来事を思い返していた。

―以後回想―

浮遊鎧（ファントム）との戦いの後、玲矢と杏里は急いで学校に向かった。

死ぬほど急いだ結果は、やっぱり遅刻。

玲矢は職員室まで杏里を送り自分の教室に向かったが、クラスメートからの痛い程の視線を浴びる事となってしまった。

全部あ…いつのせいだ。

しかし、それだけでは終わらなかった。
よりによって、玲矢のクラスに杏里が転入してきたのである。
担任が一度授業を中断すると言い出した時、頭を抱えていた。
ああ、俺の静かな学校生活が遠ざかって行く…

ー回想終了ー

「北埜君、北埜君っ！
寝てないで起きてよっ！！」
「ん、ふあぁ…誰だ？」
眠い目を擦りながら玲矢が顔を上げると、杏里が目の前に立っていた。
「あ、全ての元凶の人じゃないか」
「何の元凶っ！？」

「全部、お前のせいだ」

「何だかよく分からないけど、理不尽過ぎるよっ！？」

杏里は訳も分からず涙目になっている。

玲矢はそんな事より、気になって仕方がない事があった。

「あのさ、杏里」

「ぅんっ？」

「ちょっと場所を変えて話さないか？」

「えーっ！？
どうしてなのっ！？」

「いや、此処じゃ周りの奴らの視線が気になるというか…
転校初日から話してたら、変に思われるというかだな…」

遅刻してきた転校生と親しげに話している在校生…
それは、他のクラスメート達の視線を引き付ける標的になっていた。

しかし、杏里は玲矢とは対照的に気にも留めていないようだった。

寧ろ、玲矢の発言を不思議そうな顔で聞いていた。

「んっ？
どうして他の人に変に思われるのっ？
あんり達の仲が良さそうに見えるだけじゃないのっ？」

「ッ…！！！」

玲矢は言葉を返す事が出来なくなった。
実際、仲が良さそうに見られるのは間違いは無い。

しかし、玲矢が恐れているのは…
杏里と特別な関係であると思われる事だった。

（くそっ、面倒臭い…！
こいつはどんだけ純粋培養なんだよ！？）

玲矢は、うまく伝えられないもどかしさに唸っていた。

「〜〜〜〜〜ッ！！」

「えーと、北埜君？
どうしちゃったのっ？」

「き、気にするな…

多分、お前には一生分からないさ」

「えーっ！？

酷いよ、北埜君！！

あんり達、共に修羅場をくぐり抜けた仲だよ！？」

その瞬間、聞き耳を立てていたクラスメート達がざわつき始めた。

「修羅場をくぐり抜けた仲！？」

「修羅場って何！？」

「まさか、変な意味じゃ…」

明らかにクラス内の雰囲気がおかしくなってきた。

ガタタッ！！

玲矢は無言で机から勢い良く立ち上がり、廊下に向かって一直線に歩き出した。

「ちょっと、北埜君っ！？

何処に行くの…って待ってよっ！！」

杏里の言葉に反応出来ない程、この時の玲矢の気分を沈んでいた。

（さ、最悪だ…
もう、転校してしまいたい…）

◆

クラスメートから逃げるように教室を出た玲矢は、いつの間にか観葉植物が生い茂る校舎の裏庭来ていた。

この裏庭は、第一猪瀬高校が建てられる時に、当時の校長の趣味で造らせたものらしい。

しかし現在では、庭の管理をは専ら用務員の方々の仕事である。

そんな訳で一般の生徒が近付く事は殆ど無く、玲矢にとって、一人にになりたい時に一人になれる貴重な場所だった。

「はぁ、やっと落ち着けるな…」

玲矢はこの場所に来ると、必ず庭の隅に置かれた小さなベンチに座る。

このベンチに座ると、まるで日々の疲れを吸い取ってくれているような気がする不思議なベンチである。

今日もいつものように、小さなベンチにどっかりと腰掛ける。

「ったく、杏里め。
今日会ったばっかりなのに調子に乗りやがって。
今度会う時はビシッと言って…」

「きーたーのくんっ！！」

「ウギャアアアアァァァァ！！」

いきなり後ろから肩を掴まれ、玲矢は悲鳴を上げた。

背後にいたのは、何処からか現れた杏里だった。

「な、なんだよお前！？」

「北埜君がよく行く場所をクラスの人達に聞いたら、何人かが此処だって言ってたから来てみたんだよっ！」

「はぁ、マジかよ…」

自分がこの裏庭に居る知っているのは用務員の方々だけだと思って

いたが、そうでは無いらしい。
杏里が言うクラスメートの何人かは、おそらく一度玲矢の姿を見ているのだろう。

「で、杏里。
俺を此処まで追い回して何がしたいんだ？」

「お話っ！！」

玲矢は、思わずずっこけた。
そんな事で大事な昼休みを消費するなよ。
いつでも話ぐらい出来るだろうに…

「むっ！
北埜君、そんな事とは聞き捨てならないよっ！？」

「何でお前は俺の心まで読めるんだよ！？」

「なんでだろう、小さい頃から色んな人にそう言われるよっ？」

「え、今も結構小さいだろ…」

「むぅっ、もっと小さい時もあったんだよ！？」

杏里が怒りかけた時、言葉を遮るように予鈴が鳴った。
気付けば、昼休み終了の五分前になっていたようだ。

「あっ、ヤバい…
杏里、さっさと教室に戻るぞ！」
「ああっ、北埜君待ってよっ！！」
一人走り出した玲矢を、杏里は転びそうになりながら追い掛けた。

◇

玲矢と杏里が先程までいたベンチの後ろの茂美から、一人の少女が現れた。
玲矢よりもかなり年下、具体的には小学校高学年にぐらいその少女は、全身真っ白だった。
しなやかなツインテールの色も白、着ているドレスの色も白、肌の色も、手に持っている大きな本ですら白だった。
まるで、色を塗っていない塗り絵の世界の住人のようであった。

「あれが、キタノレイヤとツキヨアンリ…
ええと…やっぱり普通の人間と大差無いように見えますわよ、ブラック？」

西洋のお嬢様的な白少女の横に、少女と真逆の格好をしたブラックさんが現れた。

「私も最初はそう思ったわ。
でも、あの二人には才能がある。
見た目だけで人の心は分からないわ、ホワイト」

「けれど、わたくしにはそれを見抜く力があるはずですわ。
それは、わたくし達の世界で実証済みなのを貴女もご存知でしょう？」

ホワイトと呼ばれる少女は、不満げな表情で答える。

それに対してブラックさんは、如何にも面白そうな顔で答えた。

「私達の世界とこの世界は違うわ。
違うからこそ、私達はこの世界に来たんでしょ？」

「ええ、そうでしたわね。
ところで、あのお二人にわたくし達の世界の事は話しましたの？」

「いいえ、まだよ。
玲矢は、今朝『解放』したばかりだし…
杏里の方も、『解放』してからまだ一ヶ月しか経ってないもの」

「どちらにせよ、早い方がいいですわよ？
わたくしは、『解放』させた人間全員にわたくし達の世界の事を話してありますわ。
なにせ、あの悲劇をこの世界でも繰り返さない為には、人間の感情で生成された欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）の力を使う以外にありませんもの」

「分かってる…
でも、少しの間だけ待ってくれないかしら？
私は、もう少し二人を観察したいわ」

「ウフフ、貴女らしいですわね。
少しならいいですわよ。
ただし、三日以内にお願いしますわ。
奴らの二回目の大襲撃が近い気がしますわ」

「大丈夫、それまでには絶対間に合わせるわ…」

ブラックさんは、何とも言えない表情で言った。

◆

その日の帰りのＳＨＲ後、帰り支度をしている途中の玲矢は、自分の携帯電話に着信している事に気が付いた。

「あ、見たこと無い番号だ。
一体、誰だ？」

とりあえず、電話に出てみる。
すると、女性の声が聞こえた。

「あなたは、北埜玲矢よね？」

「はい、北埜ですけど…
どちら様でしょうか？」

「玲矢、私の声を忘れたの？
私は、ブラックさんよ」

「はぁ！！？」

確かに何処かで聞いた事がある声のような気がしていたが、さすがに電話の相手がブラックさんだとは思わなかった。
玲矢は、何とか平常心を保とうとしながら聞いた。

「ええと…携帯持ってたんですか？」

「まあ、便利だからね。
それにしても、人間達の技術は凄いわね」

「そ、そうですね…」

人間の技術は凄いと言われても、自分も人間なので気持ちを共有出来ない。

まあ、ブラックさんは『解放』が出来るから人間ではないんだろうけど。

「…あと、どうして俺の携帯番号知ってるんですか？
杏里にも教えてませんけど」

「あ、言ってなかったっけ？
私は『解放』をする時、相手の脳をスキャンするの。
その時にあなたの住所とか、家族構成、携帯の登録してある情報、性癖とか…
まあ、個人情報を色々ともらったからね」

「…プライバシーの侵害って騒ぎじゃないですよ！？」

ブラックさんは、悪戯っぽく笑った。

「いいじゃないの、相手を知ることは、相手と仲良くなる為の第一歩よ？」

「いや、知り過ぎるのはどうかと…」

「玲矢の好みは、黒髪のポニーテールよね？
今度会う時は、縛って来ようかしら？」

「なん…だと！？
だったら是非…じゃなくて、余計な気遣いです！！」

「ウフフ、照れちゃって。
折角だから、考えといてあげるわ」

「ッたく…
何なんですか…」

「ちょっとだけ、年下の子をからかってみたかったのよ」

「全く、迷惑極まりないですよ…」

不機嫌な玲矢に対し、ブラックさんはどこか楽しそうに話していた。

「それはさておき、あなたたち二人に話があるの。
今から、二人で屋上まで来れる？」

「はい、俺は行けます。
でも、杏里が何処に行ったか分からないんですが…」

「分かったわ、私が伝えておくから安心して。
玲矢は、まっすぐ屋上に来ていいわ」

「…分かりました」

杏里に連絡するという事は、おそらく例の脳内スキャンの時に携帯番号を読み取ったからだろう。

「早く来ないと、杏里に玲矢が黒髪ポニーテール好きだって言っちゃうわよ？」

「分かった、分かったから！
変な気だけは起こさないで下さいよ！？」

「ウフッ、分かればいいのよ」

ブツリと電話が切れ、玲矢は魂が抜けそうな勢いでため息を付いた。

「つ、疲れた…」

◇

屋上に着くと、ブラックさんが退屈そうな顔で待っていた。

「あら、早かったわね」

「…早く来いと言ったのは誰ですか？」

「だって、玲矢の好みの子の事、杏里に言いたかったのよ」

「もし、言ってたら…許しませんよ？」

「クスッ、冗談よ。
そんなに怖い顔しないで？」

二人が話していると、杏里が屋上に上がって来た。

「二人共、お待たせっ！」

急いで来たのか、杏里の息が上がっていた。

ブラックさんはそっと杏里に近付き、何やら話し始めた。

「杏里、ちょっといいかしら？」

「な、何ですかっ？」

「玲矢が好きな女の子のタイプはね…」

「待てや、このマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！」

叫ぶ玲矢を見たブラックさんは、ニヤニヤと笑っていた。

「ウフフ、言わないわよ。
人だけの秘密だものね？」

「恋人同士の秘密みたいに言うなァ！！」

「北埜君、ブラックさんと付き合ってるの？」

「違うわァ！！！」

「玲矢、落ち着きなさい。
静かにしないと、本題に入れないわよ」

「あ、すいません」

「全く、しっかりしなさい？
私の恋人失格よ？」

「その話は、もういい！！」

ブラックさんは玲矢を見てクスクス笑っている。

このままだと、このやり取りが永遠に続きそうなので、玲矢は強引に話を進める事にした。

「…で？
話って何なんですか？」

「ああ、すっかり忘れてたわ」

「忘れるなよ…」

玲矢に指摘されて、ブラックさんは少しムッとした顔をしていたが、咳ばらいをして話を始めた。

「ゴホン、じゃあ話させてもらうわよ。
それは、欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を『解放』したあなた達の使命なんだけど…」

「ん、あの浮遊鎧（ファントム）っいう奴らと戦う事か？」

「それだけじゃないわ。
真の使命は、未来から送られて来ている破壊兵（ジェノサイド）の掃討よ」

「…破壊兵（ジェノサイド）？」

「そう、私達と同じく未来から来た破壊兵器よ…」

「み、未来…！？」

予想外の言葉に、杏里はかなり驚いていた。

元々ブラックさんを人間だと思っていなかった玲矢は、多少は驚いてはいるが、杏里程驚いてはいなかった。

「…未来の世界では、ある日突然と現れた謎の自立破壊兵器・破壊兵（ジェノサイド）が出現したの。

ありとあらゆる破壊を尽す残酷なまでのその力に、人類は成す術も無くどんどん殺されていったわ。

でも、人類はそんな滅亡の危機に対抗して、人の負の感情を抜き取るなり、増幅するなりで破壊兵（ジェノサイド）に対抗出来る程強固な鎧を作り出す欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を完成させたの。

そして、その力を『解放』する私達のような人間・契約者（コンタクター）が生まれた…」

「なるほど、未来ですか…

未来の人間だから、人間離れした力を持っているんですね？」

「まあ、そういう事ね」

ブラックさんは、得意げに話を続ける。

「それから、人類は破壊兵(ジェノサイド)との戦いに勝ち、全てが丸く収まった…
はずだったんだけど。
なんと、破壊兵(ジェノサイド)が過去に飛ばされてしまったのよ。
それで、新たに契約者(コンタクター)を作り出して、過去の世界に送ったの。
それが、私達よ」

「え、ちょっと待った…
今まで俺らが戦ってたのは、浮遊鎧(ファントム)だろ？
そいつは、破壊兵(ジェノサイド)とは違うのか？」

「まあ、似たようなものよ。
話すべき時に、改めて話してあげるわ」

ブラックさんはそう言った後、屋上の出入口辺りに向かって言った。

「…で、いつまで盗み聞きしてるのかしら？」

「あらま、気付いてましたの？」

そう言って出てきたのは、ブラックさんにホワイトと呼ばれていた
少女だった。

「相変わらず勿体振って話してますわね、ブラック？」

「私には、私の考えがあるのよ。
あの任務は、信頼できる人間にしか頼めないわ」

「まあ、それは貴女の判断基準にお任せしますわ。
ですが、時間には限りというものがある事をお忘れにならない事ですわね」

ホワイトと呼ばれている少女は、今までのやり取りを呆気に取られている杏里と玲矢を見て、話し掛けてきた。

「あら、貴方方とは初対面でしたわね？
わたくしは契約者（コンタクター）の一人、ホワイト・スミスですわ。
こちらのブラック・スミスとは、旧知の仲ですの。
わたくしに聞きたい事があれば、何なりと…
あぁ、いきなり現れて、長々とお話してしまいましたわね。
御免遊ばせ？」

「「は、はぁ…」」

あまりの個性の濃さに、玲矢と杏里は引き気味だった。
本当に彼女は、ブラックさんと同じ契約者（コンタクター）なのだろうか。
玲矢はとりあえず、少し質問でもしてみる事にした。

「えーと…

ホワイト・スミスさんでしたっけ？」

「親しみを込めて、ホワイトと呼んで下さっても構いませんわよ？
その代わり、わたくしも貴方を玲矢様とお呼び致しますわ」

「あぁ…じゃあ、ホワイトさん。
少し質問しても良いですか？」

「ええ、勿論構いませんわよ。
淑女たる者、隣人の役に立てる存在でなければならないですもの」

（こ、この人色々と面倒臭っ…！！）

ホワイトさんから契約者（コンタクター）の要素を取ったら、痛い女の子だろう。
というか、何も知らない他人から見ればただの痛い女の子だ。
玲矢は頭が痛くなりそうになっていたので、大したダメージを受けていない杏里が代わりに質問をしていた。

「えーと、ホワイトさんは、ブラックさんと何が違うんですかっ？」

「大した違いはありませんわ。
ただ、『解放』の方法がちょっと違いますの」

「どんな風にですかっ？」

「ブラックの場合は、負の感情を抜きとって鎧に変換するのですが、わたくしの場合は、負の感情そのものを強化して鎧に変換できるようにするのですわ」

「…？」

「…！！」

杏里は訳が分からず、間抜けな顔をしていたが、横で話を聞いていた玲矢は大体理解できていた。

「つまり、ブラックさんが言っていた一つの感情が完全に消滅するというのは…」

「そう、それはその感情を鎧として抜き取ってしまっているからですわ。
貴方方のような抜き取り型の『解放』は、概ね安定した精神での使用が可能で、未来でも大半の鎧はこれに分類されますわ」

「それで…あなたの『解放』の場合は？」

ホワイトさんは、真剣な眼差しになって答えた。

「わたくしの増幅型の『解放』は、感情を抜き取って鎧に変える事はしませんの。
そのかわり、自分の負の感情を増幅させて、装置したい時に自分で

鎧を構築する能力を差し上げてますの」

「自分で…構築？」

「抜き取り型の『解放』は、負の感情は既に鎧として形成されておりますの。
しかし、増幅型の『解放』の場合は違いますのですわ。
感情の増幅具合により、鎧の強度を上げたり下げたりできますの」

「な、何だと…
それなら俺らが不利じゃないか！？」

「そんな事は無いですわよ？
増幅型の『解放』をした人間は、常に精神が不安定で、簡単に精神で壊れてしまいますの。
いわば、諸刃の剣ですわね」

「な、なるほど…」

ホワイトさんが色々と説明していると、ブラックさんが遮るように言った。

「…喋り過ぎよ、ホワイト！！
会って間もないのに、そんな重要事項ばかり話したら、二人共混乱するわよ！？」

「あら、お気に召しませんでした？
貴女が勿体振っておりましたので、代わりにわたくしが話したまで

ですわ」

「ホワイト、あなたは軽く考え過ぎてるわ！
この前も私が同じような事を言ったばかりに、あの子達が使命を放棄して好き勝手にし始めたのを知ってるじゃないの！！」

頭に血が上ったようなブラックさんとは対照的に、ホワイトさんは冷静に答えた。

「力を『解放』してどう使おうが、『解放』した本人の自由ですわよ。
欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）の使い方によっては、対破壊兵（ジェノサイド）最強の防衛兵器にもなり、破壊兵（ジェノサイド）以上にこの世界の平和の脅かす存在になりかねないのですわよ？
だとすれば、最初に全て包み隠さずお話して、鎧の使い方を考えさせた方が妥当ではありませんの？」

「っ…！」

ブラックさんは、顔を悔しそうに歪める。
どうやら、これ以上反論は出来ないようだった。

「それに…
このお二方ならきっと大丈夫だと思いますわよ。なにせ、貴女と『解放』した方々ですものね」

「…！」

予想外の言葉に、ブラックさんは顔は驚きの色に染まった。

「ホワイト…」

「でも、勘違いしない事ですわ。
もし、そのお二方が裏切る様な真似をした時は、遠慮なく一即処刑
（なぶり殺し）ですわよ？」

「え、それ拒否権ないだろ！？」

思わずツッコミを入れた玲矢に、ホワイトは冷たく言い放つ。

「いいえ、拒否するのは可能でしてよ？
わたくし達に勝つ自信があるのなら…」

「え、遠慮します…」

「クスッ、懸命ですわね」

満足そうなホワイトさんを見て、玲矢はげんなりとしていた。

「クソッ、もう引っ越してぇ…」

◇

ここは、第一猪瀬高校の三階の空き教室。
そこには、欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を装備した二人組の女子生徒と、機能停止した破壊兵（ジェノサイド）がいた。

「まさか、学校にまで破壊兵（ジェノサイド）が潜伏しとるとはなぁ。
ウチらが来なかったら、大変な事になっとるやん」

迷彩色の戦車のような鎧を着た女子生徒が、関西弁でそう言った。
それに対して、黒光りする青い鎧を着た女子生徒がコクリと頷く。

「そういや、エリカ。
ホワイトさんから、二年生に新しく『解放』した二人がいるって聞いたん？」

エリカと呼ばれた少女は静かに頷く。

「せやから、ウチ今からちょっとその二人に会ってみようと思ってるんやけど、どう思う？」

「…会ってどうするの？」

珍しく口を開いたエリカに対し、その関西弁の少女は空き教室の扉に手を掛けて言った。

「とりあえずは、挨拶だけや。
場合によっちゃ、敵になるかもしれないし」

ふと、関西弁の少女は、エリカがどこか落ち着かなさそうにしているのに気が付いた。

「エリカ、どないした？」

「飛鳥…鎧着たまま会うの…？」

「……ハッ…！！」

飛鳥は、そそくさと空き教室のドアを閉め直した。

第3話　コウハイ交戦記・前編

これは、杏里が転校生として第一猪瀬高校に越して来た次の日の事だ。

怠そうに登校して来た玲矢が靴箱を開けると、手紙が二つ入っていた。

「何だ、これ？
まさかラブレター…ってそんな訳無いか」

とりあえず、教室に向かいながら片方を開けてみる。

「えーと、何々…
『私は、先輩に大事な用事があります…
会って話がしたいです…
放課後、四階の空き教室で待ってますので来て下さい…
一年三組三十一番　天月エリカ（あまつきえりか）』…」

……ラブレターのようだ。

「これが、ラブレター…
い、いや、いや、待て、待て待て！
偽物かもしれない、人違いかもしれない！！

後輩だし、うん、有り得る、有り得る！！」

玲矢は、思わずラブレター（？）を投げ捨てた。

それから、二枚目の手紙の封を乱暴に開いた。

「次の手紙もどうせ人違いか何かだ。

えーと、これは…

『北埜先輩、昼休みに屋上に来てくれるんなら、ウチがええことしてアゲル♪

待ってるから、ちゃんと来てや！

一年三組　氷室飛鳥（ひむろあすか）』…」

今度は、名指し。

しかも、ラブレターというか何処か危ない感じの手紙だ。

「ドユコトナノ…？」

玲矢は、理解できない事が次々起こり、その場で固まっていた。

よりによって、教室のドアの前で。

少し経つと、杏里が教室の前までやって来た。

「北埜君っ、おはよっ！」

「これは夢、夢だ…
俺の妄想に過ぎないんだ…」
「えっ、北埜君どうしたのっ？」
「…現実と妄想の区別も付かなくなったのか、俺は！？」
「き、北埜君っ！？
とりあえず、落ち着こうっ！？」
「…うわあああぁぁぁ！！」
「落ち着きなよっ！！」
パンッ！！
「…うわっ！！」
玲矢に、杏里のねこだましが炸裂した。
効果は抜群だ！！
「何だ、杏里か…」
「え、酷くないっ！？」

涙目な杏里を無視して、教室に入る。
自分の席にどっかりと座り、例の手紙を見詰める。

「はあ、どうすっかな…」

「北埜君、それラブレター？」

「怪しいだけどな…
俺宛てか分からないのと、名指しだけど何かおかしいのがあってさ
…」

「ふーん、どれどれっ」

杏里は、二枚目の手紙を受け取り眺める。
手紙を読み進める杏里の顔が、段々と赤くなっていた。

「き、北埜君モテモテ…」

「…っるせーよ！！」

玲矢は、乱暴に杏里から手紙を奪い取る。

杏里は顔を真っ赤にして、どぎまぎしている。

「それで…北埜君はどっちに行くのっ？」

「とりあえず、天月エリカって子のとこに行くかな。
まあ、人違いってオチだろうけど…」

「そ、そうなのっ…？
氷室飛鳥さんの約束は、どうするのっ？」

「とりあえず、後回しだ。
何か嫌な予感がするからな…」

「えっ、良い事してもらえるんだよっ…？」

「…だからだよ！！」

玲矢が叫んだ時とほぼ同時に、朝のＬＨＲ開始のチャイムが鳴った。

担任が入って来るのを見て、杏里は慌てて自分の席に戻った。

杏里がいなくなった後、玲矢は深いため息をついた。

「あーあ、早退しよっかなぁ…」

◇

玲矢の気が向かないままあっという間に時間が過ぎ、放課後になった。

自分の荷物をまとめた玲矢は、乗り気じゃないまま立ち上がった。

「仕方ない、行くか。
でも、その前に…」

玲矢は、背後でじっとこちらを見ている杏里に向き直って言った。

「まさか、お前…
ずっと付いて来る気か？」

「もちろん、気になるもんっ！」

「…大人しく帰れ！！」

「えーっ！？
あんりの人権を蔑ろにしてるよっ！！」

「お前は何処でそんな言葉を…
まあ、いいや…

とりあえず、俺は行くからな」

玲矢は流れるように教室から廊下に出た。

杏里は、慌てて玲矢を追い掛ける。

「ち、ちょっと待ってよっ！！」

「あ、あんな所に乗馬マシンに乗ったブラックさんが！！」

「え、何処っ！？」

「今だ…！！」

ありがちな嘘を吐いた玲矢は、脱兎の如く戦線から離脱した。

今の嘘は、自分でも中々上出来だなと玲矢は思った。

まあ、ブラックさんに聞かれたらヤバそうだけど。

「あれっ？

北埜君、ブラックさんなんて…

あーっ、北埜君逃げるなぁっ！！」

遠くで、嘘に気付いた杏里の声がした。

だが、この距離なら追い付かれる事は無いだろう。

「とりあえず、空き教室に行かないとな…
氷室飛鳥って子には悪いが…」

玲矢は、走る速度を上げて空き教室に向かった。

◇

「四階の空き教室…
ここで合ってるよな？」

玲矢は今、指定された空き教室の前に立っている。

あのラブレターは偽物かも知れないが、正直緊張感が最高潮だった。

（お、落ち着け…
ほ、ほ、本物なら素直に答えればいい！）

玲矢は緊張のあまり、いきなり扉を開けてしまった。

「あ…」

「…！？」

中に居たのは、銀髪の美少女だった。

最初は、杏里が空き教室に先回りしていたかと思っていたが、よく見ると杏里ではない。

髪型がストレートで、黒いリボンを付けている。

指定の靴の青だという事から判断して、彼女が一年生だろう。

ちなみに、杏里の場合はリボンを付けておらず、黒が少し混ざったようなくすんだ銀髪である。

その一年生が、ゆっくりと口を開いた。

「あ、あの…北埜先輩ですか…？」

「え、まあ、俺だけど…」

「そ、そうですか…」

・・・

暫しの間、沈黙が流れる。
玲矢がいつまで沈黙が続くのかと思いはじめた時、その銀髪の一年生は再び口を開いた。

「は、はじめまして…
私が…先輩をお呼びした天月エリカです…」

「やっぱり、あの手紙は俺宛てだったのか…」

「はい…せ、先輩に会いたくて…」

「ッ！！」

玲矢は、心臓が跳ね上がる気持ちだった。

結構有りがちな台詞ではあったが、今まで生きてきてこんな台詞を言われた事のない玲矢には、とてつもない破壊力だった。

玲矢はその場でフラフラしながら、倒れまいと必死に堪えていた。

（お…落ち着け俺、落ち着くんだ！
こういう時こそ、れ、れ、れ、れ、れ、冷静になれ！！）

何とか平常心を保とうとしている玲矢に、エリカがさらに煽るよう

に喋り始めた。

「あ、あの…
先輩が…よ、良かったらその…私と…」

「えっ、ちょっ、待て待て！？
まだ心の準備も何もできて…」

「わ、私は…我慢出来ません…
自分のき、気持ちに…嘘は付きたくないんです…初めて見た時から
…ずっと思ってたんです…」

「いや、いや、いや…！！
お、落ち着くんだ、天月さん！！
確かに嬉しいけど、ちょっと待つんだ…！！
まだお互いの事知らないし…！！」

エリカは、徐々に玲矢に接近してくる。
遠慮がちに後退りしているうちに、壁に追い込まれて、いつの間に
か逃げれなくなった。

「え、ちょっと、天月さん、待って…！
これは何の冗談！？」

「じ、冗談なんかじゃ…ありませんよ…？」

エリカが、玲矢の肩にそっと手を置いた。

玲矢の脳内は、ショート寸前だった。

「天月さん、ち、ち、ち、近い、近い、近い、近いッ…！！」

「先輩の事…教えて下さい…」

「色々と駄目だああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーッッッ！！！」

ガラッ、ドサッ…！

次の瞬間、空き教室のドアが開く音と何かが倒れた音がした。

その直後、聞き覚えの無い笑い声が響いた。

「…っ、あははっ、あはははははっ！

ひ、ひっ、いぃー、お腹痛い！！」

「エッ…！？」

見ると、茶髪のポニーテールの女子生徒が笑い転げていた。
エリカと同じく靴の色が青なので、この女子生徒も一年生のようだ。

だが、今の玲矢にそんな事は関係ない。
混乱しすぎて、蚊の鳴くような声しか出ない。

「こっ、こ、こ、こ、こっ、これは…」

「…ぶっ、あっあはははは！
先輩、口が回ってないない！！」

さらに大爆笑され、玲矢は正気に戻った。

「おい、お前は何なんだよ！？」

「ふ、ひーっ…
あ、すいません。
私は、氷室飛鳥と言います」

「氷室飛鳥ぁっ！？」

氷室飛鳥といえば、もう一つの例の手紙、関西弁で書かれた手紙の
の差出人だ。

だが、玲矢は彼女に違和感を感じていた。

「お前が…この手紙の贈り主なのか？」

「そうですよ？」

「じゃあ、何で関西弁じゃないんだよ？」

「ハッ…！！」

飛鳥の顔が青ざめていくのが、玲矢には分かった。

「な、何をいうてるんや？
ウチは、生粋の関西人やで？」

…なんだこの子。

「先輩…飛鳥は、エセ関西人で…
…た、たまに素に戻るんです…」

「あー、そうなんだ。
…って、あんたら知り合いだったのか！？」

驚く玲矢に、エリカはコクリと頷く。

「という事は、まさか…」

「そうや、ウチらは先輩を試したんや。
ウチとエリカ、どっちに釣られるかなって思うてな！」

「なんてこった……」

玲矢は、がっくりと肩を落とした。

多少ではあるが、期待したりしていた自分が虚しい。

「北埜先輩、特にエリカの演技は凄かったやろ？
教え込むのに、三日ぐらいかかったんやで？」

「もう、止めてください…」

何故か敬語を使うほどへこんでいる玲矢を見て、飛鳥はニヤニヤしながら続ける。

「先輩は女の子に強引にされると、何も出来ない人だって事が分かったんや。
先輩、意外に純情なんやね？」

「止めろよ…」

「まあ、純粋な所と先輩はウチの誘いに乗らなかったって事は…色仕掛けに耐性がないってことやね！」

「…止めろと言うのに！！」

「照れてるなんて、先輩はかわええなあ」

「黙らんかぁぁぁぁぁッ！！」

思わず叫んだ玲矢に、エリカは声をかけてきた。

「せ、先輩…」

「……何だよ？」

「私も…あの時の先輩は…か、可愛かったと思います」

「～～～～～～～～～ッッッッッッ！！！！！」

玲矢は悪口にもなっていない叫び声上げながら、その場から逃げ出した。

「俺、もう帰るッ！！

このエセ関西っ子！！！！

この恋泥棒がぁぁぁぁぁ！！！！」

「あ、ちょっと、北埜先輩！？」

しかし、飛鳥が呼び止めた時には、玲矢の姿は廊下の遥か彼方だった。

「あーあ、これじゃ呼んだ意味ないやん…」

「私…や、やり過ぎたかな？」

「そ、そうかも知れへんな…」

得るものが殆ど無かった二人は、大きなため息を吐いた。

◇

次の日、昨日のごたごたで寝不足気味になった玲矢は、学校に遅刻した。

本当なら欠席してもいいような状態だったが、理由が理由なので休む訳にもいかなかった。

「…今日は何も無い。
…あってたまるか。
…あるはずがない。
…あるなんて認めない」

登校途中の玲矢は、この言葉を何十回と繰り返していた。

◇

ここは、第一猪瀬高校の二年三組教室。

まだ転校してきたばかりの杏里は、何故玲矢が学校にまだ来ないのが気になっていた。

（北埜君、遅いなぁ…
昨日はなんか知らないけど逃げちゃったしっ…）

それから杏里は、ノートの隅にブラックさんの落書きをした。

（あ、結構上手く描けたかもっ）

一見杏里は授業を真面目に受けない劣等生に見えるかもしれないが、実は逆なのだ。

元々全国有数の進学校に通っていた杏里にとって、偏差値が平凡な一猪瀬高校の授業というのは大変退屈なものだった。

今、担任が黒板に一生懸命書いている問題に限っては、おそらく三十秒あれば解けているだろう。

（あーあ、早く北埜君来ないかなぁ…）

…ガラッ！！

そう思った杏里がため息を付いた時、教室のドアが勢い良く開いた。

「すっ、すいません…
お、遅れました…」

すっかり玲矢を待ち侘びていた杏里は、思わず声を上げ、玲矢の腕に絡み付く。

「…北埜君っ！
ずっと待ってたんだよっ！！」

その瞬間、教室間の空気が凍った。
表現を変えるなら、何かがひび割れた音がした。
そして、クラスの男子生徒の冷たい目線が玲矢に降り注ぐ。

「北埜のくせに生意気だな…」

「いつの間に月夜さんとそんな関係に…」

「地味な眼鏡野郎のくせに…」

「リア充め、爆ぜろ！！」

「ピザ喰って、死ね！！」

クラスの男子の誹謗・中傷は、段々とヒートアップしていった。
非難を受けている玲矢の頬には、目から出て来た透明な液体が伝っていた。

「…俺は悪くない。
…こんな理不尽あってたまるか。

…こんな理不尽あるはずがない。
…こんな理不尽あるなんて認めない……」

そして、玲矢は派手な音を立てて倒れた。
さすがに、クラスの男子も驚いていた。

「大丈夫か、北埜！？」
「おい、何があった！？」
「倒れた、リア充が倒れた！！」
「ざまあｗｗｗ」
「不謹慎だぞ、お前ら…」
「とりあえず、保健室に運ばないと！
誰か付き添いを！！」
「わ、私が行くっ！！」

杏里が迷わず手を挙げる。
その時、玲矢の意識がかろうじて戻っていた。

「おい…杏里…」

「あ、北埜君っ！
大丈夫なのっ！？」

「大丈夫だ…
だけど、お前の…付き添いは……い……らん……グハッ……
……」

そう言った直後、玲矢は再び意識を失った。

「えーっ！？
ちょっと、どういうことなのっ！？」

腑に落ちない杏里を余所に、クラスメート達は玲矢を保健室に運んで行った。

◇

保健室のベッドに運ばれた玲矢が目を覚ましたのは、ちょうど四時限目が始まった辺りだった。

自分の精神の打たれ弱さを改めて自覚した玲矢は、魂が抜けそうな

勢いでため息を付いた。

「あーあ、これじゃ欠席同然だな…
気が向かないけど、杏里とかにノート写させて貰うか」

玲矢はベッドからゆっくり起き上がると、辺りを見渡す。
保健室の先生は見当たらず、貸し切りのような状態だった。

「とりあえず、教室に戻るか。
まあ、保健室に居た事は適当にごまかすか…」

そう言った玲矢が、保健室から出ようとドアを開きかけた時、何者かが保健室に入って来た。

「先生、頭が痛いんですが…きゃあっ！？」

「ぎゃあっ、氷室！？」

予想外の遭遇に、二人はそれぞれ悲鳴を上げる。

（会いたくない人に、早速出会ってしまった…
さて、どうするか？）

玲矢は脳をフル回転して考えた。

（とりあえず、気付かなかったフリをしてさっさと保健室を出るか？

いや、びっくりして名前を叫んでいるからな…

しかし、だからといって此処で捕まる訳にはいかない！

だったら、強攻突破するか？

よし、それで行こう！

相手はただの女子だ。

使うまでもないかも知れない！

使うとしても、最終手段だ！！

よし、行ける…！！）

この間、たったの0．5秒であった。

なんという無駄な才能。

そして、玲矢はその作戦を実行した。

「あ…よく見たら、北埜先輩じゃないですか！

どないしたんですか？」

「・・・」

作戦その一

ーとりあえず無視してスルーできるか試みるー

「あの、先輩？
ちゃんと聞いとります？」

「・・・・」

「先輩、北埜先輩ってば！！」

「・・・・」

「…無視すんなや！！」

ドゴォッ！！

飛鳥が、玲矢の後頭部に回し蹴りを喰らわせてきたのだった。
蹴られた玲矢は、保健室の扉の前から、先程寝ていたベッドの横まで吹っ飛ばされていた。
玲矢はあまりの痛さに、飛鳥に罵声を浴びせた。

「ぐあっ、何しやがる氷室！？」

（あっ、しまった…
これじゃあ、作戦を続けられないじゃん…！！）

作戦その一は、見事に失敗に終わってしまった。

さて、これからどうしようか。

「仕方ない、こうなった以上は最終手段だ…！！」

「…え、何が！？

というか、もう最終手段っ！？」

珍しい飛鳥のツッコミを余所に、玲矢は保健室の扉に向かって突進した。

「そこをどきやがれぇぇぇっ！！」

「えっ、ちょっと…！？」

飛鳥は現状が理解できず、立ちすくんでいる。

しかし、玲矢は飛鳥が気迫に押されてどいているものだと思い、それに気付く気配すら無い。

「よし、戦線離脱…」

ドカッ！！

「きゃっ…」

「うおっ！？」

玲矢は、勢い良く飛鳥にぶつかった。

まあ、当然といえば当然の結果である。

「痛っ…

ゴメン、氷室。

全然、前見てなく…」

玲矢が立ち上がろうと、地面に手を付いた時だった。

むにっ

「…！？」

地面に付いた右手に違和感を覚えた玲矢は、ゆっくりと自分の右手に目をやる。

玲矢はその時初めて、自分の置かれている状況を理解した。
玲矢は今、飛鳥に覆いかぶさるように倒れている。
そして、右手で飛鳥の胸を鷲掴み…というか、手で押し潰している。
玲矢には、飛鳥の顔が真っ赤になっているのが分かった。

「いっ、い、い、い…」

「ち、違うんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「いやあああああああああああ！！」

飛鳥は玲矢に綺麗な平手打ちを決め、保健室から廊下に脱兎の如く以下省略。

「あーあ、まずいなこりゃ…」

玲矢は打たれた頬を押さえながら、渋々教室に向かった。

◇

それから、放課後になった。
玲矢は保健室での一件が頭から離れず、一人頭を抱えていた。

「くそ、どうしてああなったんだよ…」

「北埜君っ♪
今日は一緒に帰ろっ？」

何も知らない杏里は、いつものように声をかけてくる。
だが、当の玲矢のテンションは最悪だ。

「絶対に嫌だ…
というかお前は、黙っててくれ…」

「なにそれ、酷いっ！？」

杏里は涙目だが、今回の玲矢は全く相手にする気は無かった。
とりあえず、今はそんな気になれない玲矢だった。
そんな時、玲矢の携帯の着信音が響く。

そういえば、マナーモードにしてなかったね。
…危ない危ない。

「あ、この番号はブラックさんだな。
変な用事じゃなきゃいいけど…」

そんな事を言いつつ、玲矢は通話ボタンを押す。

「もしもし、どちら様ですか？」

「もしもし、ブラックさんよ」

「あ、やっぱりあなたでしたか…」

ため息混じりで話す玲矢とは対照的に、ブラックさんは上機嫌で話す。

「うふふ、私の事思ってくれてるって事かしら？」

「それはちょっと違う気がしますけど…」

「あら、つれないわね。
そこまで否定されると、お姉さんがっかりよ」

「そう言われてもな…」

玲矢は、この手の会話は苦手だ。

どう頑張っても、そんなノリになれない。

そのせいか、玲矢は年上の人には好かれていない。

「それで、今回の用件は何ですか？」

「氷室飛鳥と天月エリカが、あなたに決闘を申し込んできてるわよ。

今から指定する場所に来なさいとか言ってるわ」

「マジかよ…

というか、何でブラックさんがあいつらを知ってるんだよ！？」

ブラックさんは、電話越しでも分かる驚いた声で言った。

「あら、知らないの？

あの二人は、ホワイトと『解放』した欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）の所有者よ？

一応、知り合いみたいだから知ってるかと思ったんだけど…」

「いや待て、そんな重要事項知らなかったよ！？

聞いてなかったよ！？」

「まあ、そういう事だから。
これからは、二人を『解放』した人間として見てあげてね？
だから、決闘には行きなさいよ？」

「いや、説明が適当過ぎだろ！？」

「ああ、場所なら放課後の屋上みたいよ？」

「いや、決闘の事じゃなくてな…？」

「ああ、そういえば…
今日の内に指定した場所来なかったら、問答無用で撃ち殺すって。
あと、決闘に来たら来たで、容赦無く撃ち殺すとか言ってたわ」

「それ、選択肢が無いよな！？」

「そうね、頑張ってね♪」

「頑張ってね…って、おいッ！？」

ブツッ、ツー、ツー…

玲矢が文句を言おうとした直後、ブラックさんが電話を切ってしまったようだった。

玲矢は、イライラしながら携帯電話を画面を閉じる。

「ったく、相変わらず気まぐれな人だな…」
「ねえねえ、ブラックさんと何を話してたのっ？」
「お前に話してたところで、お前がなんとかしてくれるとは思えないのだが…」
「えーっ、そんな事ないよっ！？
欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を着て、北埜君とあんりが戦ったら、あんりが勝つと思うよっ！？」
「はいはい、お前が強いのは分かったから。
いや、待てよ…」

この時の玲矢の頭には、ある考えが浮かんでいた。

「よし、杏里。
これから俺は屋上に行くんだが、付いて来てもいいぞ！」
「えっ、本当っ！？
杏里、何処だって行くよっ！！」
「ああ、ありがとな。
その代わりと言ったらなんだけど、ちょっと頼みたい事があるんだが…いいか？」
「ん、何かなっ？
杏里にできることは、何でもしてあげるよっ？」

「実はさ…」

それから玲矢は、杏里にある事を説明し始めた。

◇

「さて、付いたは良いけど…
誰も居ないな、早く来過ぎたか？」

玲矢と杏里は、飛鳥とエリカに指定された場所、もとい屋上に来ていた。

「北埜君、人の気配がするっ！
いつ襲って来るか分からないよっ！」

「ああ、殺気がするな。
やっぱり、怒ってらっしゃるか…
とりあえず、来たら謝らないと…」

「もう…遅いと思います…よ？」

「「…！」」

二人が振り向くと、欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を纏ったエリカが立っていた。
エリカの欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）は、いかにも西洋の騎士が着ていた鎧のような見た目をしている。

「飛鳥は…す、凄く怒って…る…
何処から…襲って来るのか…私にも分から…ないです…」

「なるほど…
ところで、天月は何で鎧を着てる？
お前も、俺を殺そうって事か？」

焦りに近い表情をしている玲矢に対し、エリカは無表情で答える。

「私は…何もしません…
私は…ただ…黙っていれば良い。
あとは…鎧が…勝手に動き…ますから」

「いや、答えになってないが…
なんなんだ、勝手に動くって？」

「私の…欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）は…『スティール・ド・ベアド』…日本語で表すと…黙する狂騎士です。
私が（・・・）何もしなくても…私の鎧（・・・）が勝手に…破壊を始める…そう、無意識に…

でも…今は鎧すら…何もしなくても…いいみたいですよ？」

「だ、だから何を…」

ズブシュ

エリカが答えるよりも先に、玲矢の頭を弾丸が貫いた。

玲矢の表情は無くなり、その場に力無く倒れ込んだ。

文字通り、玲矢は撃ち殺された。

「そんなっ！？

ねえ、起きてよっ！

返事してよ、北埜君っ！！」

「飛鳥…本当に…これで良かった…の？」

エリカが空に向かってそう言うとに、戦闘機のような欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）を纏った飛鳥が急降下してきた。

「確かに少しはスッキリはしたけど…

後味は良くないなぁ…

まあ、容赦はしないとは言ったんやけど」

そんな会話をしている二人に、杏里は涙を堪えながら振り向いた。

「…どうして話も聞かないで殺したのっ？
北埜君、謝るつもりで来たんだよっ？」

「ん、あんたは転校して来た月夜先輩？
あんた、もしかして知らないの？
北埜先輩はウチにした事を…」

「知ってるよっ、全部北埜君から聞いたからっ…」

「じゃあ、別に殺されても文句は言えな…」

「…そんなの間違ってるよっ！！！」

杏里は、今までに無いぐらいの大声で言った。

思わず、エリカと飛鳥はたじろいだ。

「だっ…だったら！！
月夜先輩は、そ…そんな事されたらどうするんですか！？」

「あんりなら、北埜君を許すよっ！
だって、北埜君はそんな事したくてした訳じゃないもんっ！！
大体、あんりはそんなに胸大きくないからその気持ちを共有できないっ！！」

「なっ…！！」

予想外の杏里の言葉に、飛鳥は顔が再び真っ赤になった。

「だ…だったら…！！
月夜先輩の胸が仮に大きかったとして、それでも触られても許すって言うんですか！？」

「そ、そうだよっ！！
ちょっと動揺するかも知れないけどっ、許さないなんて事は絶対にしないよっ！！」

「くっ…」

二人は、お互いを理解できずに睨み合う。
しばらくの間、屋上に沈黙が続いた。
そして、先に口を開いたのは飛鳥だった。

「確かに、月夜先輩の言う事は正しいです…
だけど月夜先輩、私は当然の報いだと思って北埜先輩を撃ちました。
本当は殺すつもりは無かったけど、殺してしまった…
でも、私は悪く無いと思うんです。

いわばこれは、痴漢に対する、正当防衛…」

パァンッ！

飛鳥は、自分の頬に走った痛みに驚く。

涙をボロボロ零している杏里が、飛鳥に思いっ切りビンタをしたのだ。

「言い訳しか言うことはないのっ！？
人を殺しておいてっ！？
そんなんだから、飛鳥ちゃんとエリカちゃんは欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）の所有者の使命を投げ出したりするんだよっ！！」

今の一言が気に障ったのか、飛鳥の顔は不機嫌そうになった。

「それは聞き捨てならないですね。
あんたに、私達の何がお分かりになりますか！？」

「分かるよっ、飛鳥ちゃんが間違ってる事ぐらいはっ！！」

「そう…ふはははは…！！
つくづく、ムカつく先輩だねあんたは…！！」

飛鳥は怒りで引き攣った顔で、吐き捨てるように言った。

「…言いたい事はそれだけ？
だったら、私達が殺してあげる。
あんたを殺せば、私達が正しくなるからな！！」

「あんりは、こんなところで殺されないっ！
間違ってるって事を、飛鳥ちゃんに分かってもらうまでっ！！」

「ハッ、やってみて下さいよッ！！」

飛鳥の両腕が軽く震えたと思うと、そこから巨大な複数のガトリング銃やショットガンなどが出現して、飛鳥はそれらの幾つかの銃器を手に取る。

「孤独の軍隊の名を持つ、この『アレイン・ミリタリー』を装着した私が倒せるならねッ！！」

杏里は冷たい表情を変えずに、自らの欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）である『リベルテ・レーヌ』を展開した。

「飛鳥ちゃんは銃を使うんだねっ…？
だったら、弓を使うあんりにも勝ち目がありそうだねっ…」

「ハッ、遠距離戦に持ち込もうってかい！？

もしかして、エリカの事も忘れてるんじゃあないですよね！？」

杏里は、飛鳥の隣に立っているエリカに視線を移す。

エリカの顔は、すでに人間らしさが無かった。

これが、彼女の言う無意識の状態なのだろう。

だが、杏里の顔には迷いが無かった。

「もちろん、分かってるよっ…

それを踏まえて、勝ち目があるって言ってるんだよっ？」

それを聞いた飛鳥は、不気味に笑った。

「クフフ…そうですか。

上等です、楽しませてくださいよッッッ！！？」

その一言で、飛鳥とエリカは杏里に襲い掛かって来た。

※

「此処は何処だ…？」

玲矢は、ただ白と黒混ざったような色をした荒野が果てしなく続くような場所に倒れていた。

間違いなく此処は、先程まで居た第一猪瀬高校ではなかった。

「此処は、欲望の鎧内（ディザイア・プロテクション）の欲望が詰まってる異空間さ」

「…！？」

「よお、お前が此処に来るなんて珍しいじゃねえか？」

玲矢は声がした方に振り返ると、そこにはもう一人の玲矢が居た。

「お、お前は…何なんだよ…？」

「失礼な奴だなぁ…
いつもお前の頭の中に居たじゃねえか？」

「頭の中って、まさか…」

「ああ、俺はお前の消したがってた『臆病』の感情をを司る人格だよ…！！」

もう一人の玲矢は、ここぞとばかり叫んだ。
それを知った玲矢の顔は、どんどん青ざめていった。

「なんだよ、お前…
今更、こんな俺に何する気だ！？」

「おいおい、随分冷てぇ態度だな。
最近は、体張ってお前を守ってやってるっていうのによぉ！」

「な、何の事だよ！？」

「そうそう、俺の新しい名前も付いたよな！
確か、『ブレイブ・キャヴァリィ』だっかぁ？」

「なっ…！！
お、お前…まさか！？」

「そうさ、今の俺はお前の欲望の鎧（ディザイア・プロテクション）なのさ！！
ククク、驚いたか？
あっはははははははははははは！！」

玲矢は、愕然とした。

か自分が一番消したがっていた感情に守られていたなんて、誰が考えようか。

そんな様子を見たもう一人の玲矢は、ニヤニヤ笑って言う。

「まあ、落ち着けよぉ。
今のお前は、そんな事を気にしてる場合じゃないだろぉ？」

「そ、そんな事って何だよ…？
お前に、俺の苦痛が分かるのかよ！？」

「分かんねぇな。
自分が死んでるっていうのに、そんな事言ってるお前がなぁ！！」

「し、死…！？」

「ああ、体はまだ使えるかも知れないがな…
少なくとも脳は使い物になんねぇぜぇ？
生きてるんだったら、鎧の中に居ないだろぉ？」

玲矢は、自分の意識が飛んだ瞬間を思い出す。
頭を何かが通過する感覚と、その瞬間からとてつもない怠さが全身を回ったような気がした。

「まさか、俺は…
あの時、撃たれたのか…？」

「ああ、そうさ！
ふははは、実にあっさりした最期だったなぁ！！
あはははははははははははははは！！」

死を自覚した玲矢は、がっくりとうなだれた。
しかも、それを一番嫌いな人格に明かされた。
玲矢はこの時初めて、心からの絶望感に駆られた。

「まあ、そう落ち込むなよ？
仮に生き返る事ができなくても、お前を殺した奴に復讐する事はできるんだからさぁ！」

「どういう…事だ…？」

「まあ、任せろよ？」

もう一人の玲矢は、悪役っぽい満面笑みで笑って言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3811y/

DesireProtection〈ディザイア・プロテクション〉

2012年1月3日15時47分発行